

図書館の思い出

わだ けんじ
和田 賢治
(商学部教授)

最初の図書館の記憶は小学校の図書館である。いまにして思えばわずかに教室2つ分くらいの大きさだったが、当時はとても大きく感じられた。少年少女世界の名作文学の金箔の背文字や表表紙の絵を覚えている。1982年に入学した中学の図書室は岩波文庫が沢山あったこと以外あまり覚えていないが、同じ敷地にあった大学の図書館は入り口にゲートがあり緊張しながら入ったことや背の高い書架を覚えている。1988年に大学生になると図書館は主に書籍を借りる場所であった。1-2年生の頃は一般教養の科目の、3-4年生になると専門の科目の教科書や参考書を借りた。また狭いが自分の専攻専用の図書室もあり、リザーブというものを初めて目にしたのもこの頃である。1992年に大学院生になると、総合図書館は荘厳な雰囲気であり、また横長で奥行きが狭い机が使いづらかったので、もっぱら自分の専攻の図書館を利用していた。この図書館は蔵書は膨大にあるが閉架だったので、閲覧券を預けて書庫に入り、二人で向かい合わせになっている机で本やコピーした論文の内容を確かめた後は、自分の研究室で本を読んだり論文を読んだりしていた。その後1993年秋からアメリカ中西部の大学院に留学した時の図書館は開架であり、24時間開いていた。深夜も図書館と寮をつなぐバスが走っており、多くの学生は6人ほど座れる大型の平机で深夜まで勉強していた。また地下には軽食の食べられるカフェテリアがあったのでそこで勉強の合間に一息入れることもあった。もっとも私の寮の部屋は、一方の壁沿いが全部細長い勉強机になっており、机の上は大量の本を収納できる作り付けの本棚になっていたため、図書館で論文をコピーした後、勉強は主に部屋で行っていた。その後帰国して1999年に大学院の教員になった。勤め先の大学院の図書館は、小さいながらも専門分野の和書・洋書がよくそろっており、また有価証券報告書も冊子ですべてそろっていたので、研究・教育用に活用させていただいた。その頃から物理的形態のある冊子以外に電子媒体（オンライン雑誌やオンラインデータベース）も図

書館で購入し始めていた。データベースは図書館の端末で操作しないと使えないものが多かったが、オンライン雑誌は自分の研究室からでも使用できるものがあつた。9年ほど大学院で教えた後、2008年に同じ大学の学部へ転籍したが、大きな図書館が2つあり、その後別の建物の地下に図書室もできた。この頃になると図書館での電子媒体の導入が進んだ。そして自分の研究室だけでなく、学外からもこれらの電子媒体にアクセスできるようになった。学外からのアクセスは非常に便利で、2011年に研究休暇を一年頂戴してアメリカの大学院で研究したとき、その大学院の電子媒体ではなく、自分の大学の電子媒体だけで研究に全く支障がなかった。学外からのアクセス化については、関係者の方々に感謝してもしきれない。この場でお礼を申し上げます。このように素晴らしく整備された電子媒体のおかげで研究が便利になったが、一方で図書館からはますます足が遠ざかった。教員になって自分がリザーブを指定する側になったが、リザーブの指定もオンラインでできてしまう。図書館に行くのは、本を借りる以外には、リザーブについて本の乱れ具合で学生の利用状況を把握するぐらいになってしまった。以前はビジネスや学術雑誌の最新号が面展してある書架を一通りまわって気になる記事を読んだりしていたのだがそれもなくなっていった。そのような状況で、最近書架にあって雑誌がほとんど面展されておらず、そもそもかなりの種類の雑誌がオンラインに移行してしまっているのにショックを受けた。スペースや価格の問題もあるので書籍や雑誌のオンライン化はやむを得ないが、オンライン上で雑誌の表紙の擬似的な面展や速読機能があれば利便性が高まると思う。昔はレコードのジャケ買いという言葉があつたが、ビジネス雑誌は表紙をみて活字の大きさと主要な記事を判断できたし、学術雑誌は手にとってばらめくことで内容を判断できた。このような利便性が失われたのは残念で是非これらの利便性の回復につながるような仕組みの開発をお願いしたい。